

資料

中学生における一般的統制感と時間的展望の関連性

杉山 成¹AN ANALYSIS OF RELATIONSHIP BETWEEN THE GENERAL PERCEIVED CONTROL
AND THE TIME PERSPECTIVE IN JUNIOR HIGH SCHOOL STUDENTS

Shigeru SUGIYAMA

The purpose of the present study was to clarify the relationship between the time perspective and the general perceived control. A questionnaire of the time perspective and a scale of the general perceived control were administered to 284 junior high school students (140 males and 144 females). By factor analysis, the time perspective questionnaire was divided into three factors, named as follows : "unsatisfaction for past, present and future", "future-orientation" and "past-orientation". The main results were summarized as follows : (1) The low group of the general perceived control showed higher degree of unsatisfaction for past, present, and future than the high group. (2) In the high group of the general perceived control, the relationship between the unsatisfaction for past, present and future, and the future-orientation showed positive.

Key words : time perspective, general perceived control, past-orientation, future-orientation.

問題

個人の過去や未来に対する認知や態度は時間的展望 (time perspective) といわれている。Lewin (1942) は、場の理論のなかで時間的展望を生活空間の要素の 1 つとして位置づけ、個人の生活空間が現在だけではなく未来や過去をもその中に含んでいると考えており、集団のモラール、粘り強さ、要求水準(目標設定)、およびリーダーシップなどが時間的展望のあり方に強く依存していることを指摘している。また、臨床心理学の立場からも、Minkowski, E. らによって人格の構造と時間の関係や精神病者における時間感覚の障害などの問題が述べられてきた (勝俣, 1974)。

個人の時間的展望に影響を及ぼす要因には、社会経済地位に関する要因をはじめとしてさまざまなものが

とりあげられてきたが、主要な心理的要因としては「自分が望んだとき (その気になったとき) に、自分の欲する結果が得られる可能性についての期待 (樋口・鎌原・大塚, 1983)」と定義される個人の統制感 (perceived control) が考えられる。

従来、個人の統制感を扱う概念には、対象や状況に特殊的な期待に関係するものと、「信念」のような比較的安定した存在として個人の行動のすべてに一貫して関わる一般的期待に関係するものがあり、後者の代表的なものは、Rotter (1966) の Locus of Control 概念である。この概念においては、個人の統制に関する一般化された期待が、内的統制と外的統制という両極を持つ一次元的な連続体としてとらえられる。内的統制への期待は、自分自身の行動がある成果をもたらすという期待 (一般的統制感が高い) を指し、外的統制への期待は、自分の行動以外の外的な力が結果の生起を左右するという期待 (一般的統制感が低い) を指す。

¹ 立教大学文学研究科 (Rikkyo University)

一般的統制感はこのように未来における成果獲得に対する期待が一般化されたものであるので、個人の未来への時間的展望の形成と密接な関連を持つ。たとえば、5, 8, 11学年生の自己責任性と未来的時間展望の長さとの関連性を検討した Lessing (1968) は、彼らの自己責任性得点と未来的時間展望の長さが対応を持ちながら、学年が上がるにつれて上昇していくことを見いだしており、このことは、自分が行動を統制しうるという認知が未来的時間展望の発達において基礎的役割を担っている可能性を示唆するものといえる。

さらに、一般的統制感と時間的展望との間には、一般的統制感が未来的時間展望を形成するのみでなく、さらにそれを通じて現在の活動への動機づけの強さに影響を及ぼす過程が推測される(杉山, 1993)。すなわち、現在における高い一般的統制感は、未来への統制感まで拡張され、自己の活動(たとえば学生にとっての勉強活動)の積み重ねによる未来の成功への期待、それに基づいた positive な時間的展望(個人的未来に対する positive な態度、長く、かつリアリティのある時間的展望等)を構成する。そして、Calster, Lens & Nuttin (1987) が、現在の勉強が自己の positive な未来に結びつくと考えている学生の勉強に対する動機づけが他の学生に比して高いことを示しているように、この場合も、高い一般的統制感を持つ個人においては、現在の活動が positive な未来に対する主観的な道具性(perceived instrumentality)を持つため、その活動に対する動機づけが上昇するのである。

このように、個人が高い一般的統制感を獲得した場合には、それを軸として未来への positive な展望が形成され、それによって未来の成果獲得を目指して現在の行動が調整されるのに対し、一般的統制感が未獲得であったり、低いものであったために統制不可能事態で喪失してしまった場合には、positive な未来への展望を形成することができず、それゆえに未来的時間展望によって現在の行動が調整されない行動、たとえば、非行のような刹那的・短絡的な行動や、無気力のような動機づけの低下した状態を示すことが推測される。

本研究では、こうした時間的展望と一般的統制感および行動との関連を検討する端緒として、一般的統制感の個人差と時間的展望の各側面、特にこれまであまり統制感との関連が検討されてこなかった時間的志向性や時間的態度との関連性を検討する。

被験者は青年期にあたる中学生である。青年期は、時間的展望に関して深刻な変化の時期であり、現実と非現実の水準が漸次分化はじめ、自分自身の理想目

標や価値と、他方の期待の現実構造が考慮されなくてはいけない現実という両方に一致するような形で、時間的展望を構造化することが要請される時期(日高・吉田, 1980)といえる。こうした青年期において、一般的統制感を基礎として時間的展望の各側面が構成されていくのであれば、Lessing(1968)の指摘するような時間的展望の長さのみではなく、時間的志向性や時間的態度といった時間的展望の他の側面においても、一般的統制感の高群と低群の間に違いがみられることが予想される。

方 法

被験者: 調査の対象となったのは東京都内の市立中学の1~3年生284名(男子140名、女子144名)である。

調査時期と実施方法: 調査は1991年12月上旬~下旬の授業中に実施した。

質問項目の構成

(1)一般的統制感尺度

神田(1993)の子ども用一般主観的統制感尺度を使用した。これは Rotter (1966) の1次元的な Locus of Control 概念に基づいて作成されたもので、26項目から構成される。評定は4件法(「そう思う」、「少しそう思う」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」)で行い、とりうる得点の範囲は26から104点である。高得点であるほど統制感が高いことを意味する。項目としては「学校でまじめにやっていると、いつかはいいことがある」、「知り合いに有名人がいないと出世するのはむずかしい(逆転項目)」などがある。

(2)時間的展望質問紙の項目

時間的展望の研究対象には、extension(概念化された将来の時間的範囲の長さ)、density(個人が未来に予想する出来事や経験の数)、directionality(現在の瞬間から未来へと移行する感覚)等、いろいろな概念(変数)が考えられるが(都筑, 1982)、Nuttin & Lens (1985) は、こうした時間的展望の概念に関して、それを extension や density といった変数と対応する狭義の時間的展望と、時間的態度(個人の過去、現在、未来に対する positive ないし negative な態度)、時間的志向性(過去、現在、未来の対象や事象に対して、それらが優勢的に志向されている場合の個人の行動や思考における方向)という3つの側面でとらえている。本研究では、これまであまり検討のなされていない時間的態度と時間的志向性を対象に一般的統制感との関連性を検討する。

青年の時間的展望の構造を文章完成法によって分析した白井(1987)は、過去は受容、現在は充実、未来は

希望と目標指向性という側面でとらえられることを示唆している。そこで、時間的態度に関する質問項目に関しては、それを参考にして、過去に対する態度として過去の生活・努力の評価、現在に対する態度として現在の充足感、未来に対する態度として未来の明るさ・希望に関する項目を設定した。また、時間的志向性については、過去志向性を問う項目、および未来志向性を問う項目を設定した。項目は、主に小宮山・星・高橋・川田(1976)、勝俣・篠原・村上(1982)から選出し、一部は自作した。項目の回答形式はすべて「まったくその通り」から「まったくちがう」までの5段階評定により、それぞれの応答に対して、5点から1点までの得点を与える。

結果と考察

項目分析の結果、一般的統制感尺度の各項目と当該の項目を除く合計得点との間にすべて0.1%水準で有意な相関が認められた。また、Cronbachの α 係数は約0.73であり、項目の数を考慮すれば十分な内的整合性を持つものと考えられる。よって26項目の合計得点を個人の一般的統制感の指標として採用した。この一般的統制感尺度の合計得点は44点から97点までの範囲に分布しており、平均は73.17(標準偏差9.24)。また、男女の間には有意な差はなかった(男子の平均は73.57、標準偏差9.55、女子の平均は72.77、標準偏差は8.93。 $t=0.73$, $df=282$, n.s.)。これらの結果は、過去の調査事例(神田, 1991; 1993)とほぼ一致する。また、一般的統制感尺度合計得点の分布は正規分布に近かったので、合計得点に基づいて被験者を2分し、低得点の被験者群を一般的統制感低群(一般的統制感得点は72点以下の135名)、高得点の被験者群を高群(一般的統制感得点は73点以上の149名)とした。一般的統制感得点の平均値の検定を行ったところ、両群間に有意な差が認められた($t=22.57$, $df=282$, $p<.001$)。以下の分析はこの2群の比較によって進めていく。

まず、時間的展望項目14項目の内的な構造を検討するために、全体の284名のデータについて因子分析を行った。因子の固有値が1.00以上という基準によって主因子法により3因子を抽出し、オブリミン法によって回転させたところ、TABLE 1に示すような因子負荷のパターンを得た。

第1因子は「毎日が楽しい(因子負荷量は負の値)」、「自分の将来の見通しは明るい(因子負荷量は負の値)」、「ちょっととしたことで未来に希望が持てなくなる」「これまであまりいいことがなかった」等が属する因子であり、過去・現在・未来に対する態度の側面に関わる

項目が時間次元を越えて1つの因子にまとまつたものである。それゆえ、「過去・現在・未来に対する不満足」として解釈することができる。第2因子には主に未来志向性として設定した項目、第3因子には主に過去志向性として設定した項目がまとまっている。それゆえ、第2因子は「未来志向性」、第3因子は「過去志向性」の因子としてとらえられる。

TABLE 1 時間的展望項目の因子分析の結果

第1因子 過去・現在・未来に対する不満足 (固有値2.61)		因子負荷量
1. 毎日が楽しい		-.7470
2. 自分の将来の見通しは明るい		-.5699
12. ちょっとしたことで未来に希望が持てなくなる		.5415
5. これまであまりいいことがなかった		.5388
11. 不満なことがたくさんある		.5284
13. 小さいときに頑張ったことが今役にたっている		-.4598
8. 一日一日が長い		.4054
第2因子 未来志向性 (固有値1.72)		因子負荷量
10. 自分の目標のために努力している		.6388
9. 自分の今やっていることが将来に影響する		.5989
3. 1996年はずいぶん先のことだ		-.5013
14. はやく大人になりたい		.4566
第3因子 過去志向性 (固有値1.36)		因子負荷量
7. もう一度小さい頃に戻ってやりなおしたい		.7465
4. 小学生の頃のことをよく思い出す		.7328
6. 実現しそうもないことばかり考える		.4310

このように本研究においては、青年における過去・現在・未来に対する態度が、個人の生活空間のなかで時間次元を貫いた人生全体に対する1次元的な態度を構成する傾向が認められた。また、過去や未来に対する志向性については、それらが過去や未来に対する態度とは別の因子として独立的に存在していることが確認された。従来の時間的展望研究においては、過去の評価が高いことを過去志向(past-oriented)としたり、未来への評価が高いことを未来志向(future-oriented)として扱ってきていることがある。しかし、本研究の結果からは、過去にもどりたいとか、早く未来に行きたいという時間次元に対する志向性は、過去や未来に対する態度と同一次元の存在ではなく、他の独立した側面であることが示唆される。

次に、一般的統制感高・低群における時間的展望の14項目の平均値を算出し、平均値の検定を行った

(TABLE 2)。また、過去・現在・未来に対する不満足が未来志向性・過去志向性に及ぼす影響性を検討するために、各因子を構成する項目の得点を合計して各因子の因子得点とし、過去・現在・未来に対する不満足の得点を説明変数、未来志向性・過去志向性の得点を基準変数とした単回帰分析を行った。TABLE 3-1は一般的統制感低群における結果、TABLE 3-2は高群における結果である。

TABLE 2 時間的展望項目の平均値の検定の結果

時間的展望の各項目	一般的統制感の2群		t(282)
	統制感低群	統制感高群	
第1因子 過去・現在・未来に対する不満足			
1. 毎日が楽しい	3.25(1.16)	3.83(1.09)	-4.33***
2. 自分の将来の見通しは明るい	2.64(1.06)	3.06(0.89)	-3.58***
12. ちょっとしたことで未来に希望が持てなくなる	2.82(1.30)	2.33(1.16)	3.38***
5. これまであまりいいことがなかった	3.05(1.21)	2.38(1.08)	4.87***
11. 不満なことがたくさんある	3.48(1.20)	3.07(1.21)	2.88**
13. 小さいときに頑張ったことが今役にたっている	2.76(1.20)	3.26(1.16)	-3.55***
8. 一日一日が長い	2.65(1.23)	2.17(1.25)	3.17**
第2因子 未来志向性			
10. 自分の目標のために努力している	2.91(1.24)	3.46(1.10)	-4.01***
9. 自分の今やっていることが将来に影響する	3.27(1.18)	3.46(1.17)	-1.40
3. 1996年はずいぶん先のことだ	3.10(1.36)	2.61(1.21)	3.17**
14. はやく大人になりたい	2.92(1.39)	2.80(1.32)	0.75
第3因子 過去志向性			
7. もう一度小さい頃に戻ってやりなおしたい	3.57(1.34)	3.14(1.44)	2.55**
4. 小学生の頃のことをよく思い出す	3.16(1.41)	3.09(1.25)	0.44
6. 実現しそうもないことばかり考える	3.59(1.25)	3.25(1.25)	2.27*

括弧内は標準偏差 * p<.05, ** p<.01, *** p<.001

TABLE 3-1 過去・現在・未来に対する不満足を説明変数、過去志向性・未来志向性を基準変数とした回帰分析(一般的統制感低群)

説明変数	基準変数	
	未来志向性	過去志向性
過去・現在・未来に対する不満足	.011	.211**
数値は標準回帰係数 * p<.05, ** p<.01		

数値は標準回帰係数 * p<.05, ** p<.01

TABLE 3-2 過去・現在・未来に対する不満足を説明変数、過去志向性・未来志向性を基準変数とした回帰分析(一般的統制感高群)

説明変数	基準変数	
	未来志向性	過去志向性
過去・現在・未来に対する不満足	.255**	.163*
数値は標準回帰係数 * p<.05, ** p<.01		

— 56 —

まず、第1因子である過去・現在・未来に対する不満足に関しては、それを構成する7項目すべてにおいて両群間に有意差がみられ、一般的統制感の低群の方が高群に比して、過去・現在・未来に対して不満足な態度を持っていた。従来、個人の適応の指標は主に現在の評価に限定されていたが、近年、Diener, Emmons, Larsen, & Griffin (1985) は、主観的 well-being の要素として、現在の状態に対する評価だけではなく、人生を総括しての全体的評価という観点からの人生満足感(life-satisfaction)を検討する必要性を述べている。本研究における第1因子は、そうした人生全体に対する満足感という指標と類似していると思われる。それゆえ、こうした指標と一般的統制感との関連性を示唆するものといえよう。

第2因子の未来志向性については、2項目において両群に有意差がみられ、一般的統制感の高群の方が未来の目標に対して働きかけている認知を持つことが確認された。また、「1996年」という未来の時期への距離の認知は、未来志向性の因子に属しており、一般的統制感の低群の方が、より遠いものとして未来の時期を認知していることが示された。青年期における将来目標の特性と自我同一性地位との関連について検討した都筑 (1993) によれば、自我同一性達成地位の個人は、将来目標をより重要で、努力等の内的要因によって達成しうるものととらえ、さらにその将来目標に向けての高い準備性を示す。このように、未来の対象に魅力を感じ、その実現に対して高い統制性を認知している個人の現在は、その未来の対象実現のための準備によって満たされ、それゆえに未来志向的な傾向を示し、未来までの間隔に関しても短く感じる。一方、未来の目標の実現への統制感が低く、それゆえに明確な未来的時間展望を持たない個人にとっては、Nuttin & Lens (1985) の指摘するように、未来までの間隔は「空白の期間」となり、その目標や未来への距離感を増大させるのであろう。一般的統制感の高・低群の未来志向性に関する傾向の相違は、こうした未来への現在の準備性の違いを反映していると考察される。また、第1因子の過去・現在・未来に対する不満足がこの未来志向性に及ぼす影響性については、一般的統制感の両群において異なる傾向を示しており、高群においては過去・現在・未来に対する不満足からの有意な影響が認められたのに対し、低群においてはそうした傾向はみられなかった。

第3因子の過去志向性についても2項目において両群間に有意差がみられた。「過去にもどってやりなおし

たい」というような非建設的な過去志向の傾向は、低群の方が有意に強かった。また、過去・現在・未来に対する不満足から過去志向性への影響については、両群において有意性が認められたが、その傾向は低群の方が、より強いものであった。

過去・現在・未来に対する不満足が未来志向性、過去志向性に及ぼす影響性については、上のように一般的統制感の両群において異なる傾向がみられた。過去・現在・未来に対する不満足が未来志向性に及ぼす有意な影響は、一般的統制感の高群においてのみ確認され、一方、過去志向性に及ぼす影響は低群の方が高群に比して強かった。こうした両群の相違は以下のように考察される。杉山(1993)は、解決不可能な課題を行わせることによって被験者の統制感を低下させ、その前後のTAT図版への反応に現れた時間的展望を比較した結果、課題後の未来的時間展望が統制感の減少と共にnegativeに変化することを見いだしているが、こうした現在の統制感が失われるような状況に接した際に、一般的統制感の高群では低群に比して、未来への統制感が失われることが少なく、むしろ現在とは異なる未来を創造していくという動機づけが高まり、それゆえ、意志や行動が未来の目標への努力といった未来への働きかけという方向を向き、未来志向的になる。一方、一般的統制感の低群は、結果をコントロールできるという認知が低いため、統制感が失われるような状況に陥ったときに、意志や行動が未来を向かず、現在からの逃避としての過去志向を示すものと考えられる。Brannigan, Shahon, & Schaller(1992)は、一般的統制感の低い外的統制の個人が内的統制の個人に比して、過去志向的なdaydreamを多く経験していることを示しており、このことは上の考えと一致するものと思われる。

以上のように、本研究においては過去・現在・未来に対する態度と未来・過去志向性に関して一般的統制感の高・低群間の比較を行った。その結果、1つの因子としてまとまった過去・現在・未来に対する不満足の因子と過去志向性・未来志向性との関連性において、一般的統制感の高・低群間において異なる傾向が示され、一般的統制感と時間的展望における時間的態度および時間的志向性との関連性が示唆された。今後は、時間的展望における他の側面(たとえば時間的関連性や展望内容のリアリティといった側面)との関連性の検討や、時間的展望の各側面と一般的統制感の発達に関する継続的検討を通して、時間的展望の形成において一般的統制感が果たしている役割をより明確にしていく必要がある。

引用文献

- Brannigan, G.G., Shahon, A.J., & Schaller, J.A. 1992 Locus of control and time orientation in daydreaming: Implications for therapy. *Journal of Genetic Psychology*, 153, 3, 359-361.
- Calster, K.V., Lens, W., & Nuttin, J. 1987 Affective attitude toward the personal future: Impact on motivation in high school boys. *American Journal of Psychology*, 100, 1, 1-13.
- Diener, E., Emmons, R.A., Larsen, R.J., & Griffin, S. 1985 The satisfaction with life scale. *Journal of Personality Assessment*, 49, 71-75.
- 日高三喜夫・吉田昭久 1980 Time Perspective研究の概観 茨城大学教心・異教・職指学科 教育心理と近接領域, 5, 83-94.
- 樋口一辰・鎌原雅彦・大塚雄作 1983 児童の学業達成に関する原因帰属モデルの検討 教育心理学研究, 31, 18-27.
- 神田信彦 1991 小学生の主観的統制感と不登校の関係の分析 —不登校欲求との関連— 立教大学心理学科研究年報, 34, 57-62.
- 神田信彦 1993 子ども用一般主観的統制感尺度の作成と妥当性の検討 教育心理学研究, 41, 275-283.
- 勝俣暎史 1974 時間的展望テスト(TPT)に関する研究(II) —破瓜型精神分裂病患者のTPT解釈例— 熊本大学教育学部紀要, 23, 人文科学, 195-206.
- 勝俣暎史・篠原弘章・村上みどり 1982 非行少年の時間的展望 熊本大学教育学部紀要, 31, 人文科学, 267-277.
- 小宮山要・星 悅子・高橋和雄・川田三夫 1976 非行少年の生活意識に関する研究 科学警察研究所報告, 防犯少年編, 17, 83-93.
- Lessing, E.E. 1968 Demographic, developmental, and personality correlates of length of future time perspective (FTP). *Journal of Personality*, 38, 183-201.
- Lewin, K. 1942 *Time perspective and morale*. New York : Houghton Mifflin. (末永俊郎訳 1954 時間的展望とモラール 「社会的葛藤の解決」東京創元社)
- Nuttin, J., & Lens, W. 1985 *Future time perspec-*

- tive and motivation : Theory and research method. Leuven : Leuven University Press/ LEA.
- Rotter, J.B. 1966 Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, 80 (Whole No.609), 1-28.

白井利明 1987 現代青年の時間的展望の構造(1)
—大学生と専門学校生を対象に— 大阪教育大学
紀要(第IV部門), 38, 21-28.

杉山 成 1993 時間的展望の社会心理学的研究
—時間的評価の関連要因についての検討— 1992

年度立教大学大学院文学研究科修士論文(未公刊)
都筑 学 1982 時間的展望に関する文献的研究 教
育心理学研究, 30, 73-86.

都筑 学 1993 大学生における将来目標の内容と特
質 日本心理学会第57回大会発表論文集, 481.

謝 辞

本論文の作成にあたりご指導頂いた立教大学・水口
禮治先生, 調査のためにご協力頂いた白梅学園短期大
学・神田信彦先生に深く感謝いたします。

(1994.6.16受稿, 7.23受理)